

肥前磁器と初期マイセン磁器 (3)

松 尾 展 成

目 次

- (1) 初めに
- (2) 中国における磁器の生産 (30巻3号)
- (3) 日本における磁器の生産 (30巻4号)
- (4) アジア・アフリカへの中国磁器輸出
 - (i) 時代別概観
 - (ii) 一括伝世品 (本号)

(4) アジア・アフリカへの中国磁器輸出

(i) 時代別概観

長い間、中国でしか生産できなかった磁器は、さまざまな地域に輸出された。本節では、アジア・アフリカへの中国磁器の輸出をしてみる。まず、時代別に概観し、次に、一括伝世品を、さらに、重要遺跡の大量出土品を、紹介する。区分が私には困難なので、以下では、青磁と唐代白磁は磁器に含めることとする⁽¹⁾。なお、前稿脱稿後に、関連文献などについて、青柳洋治、大庭康時、佐々木達夫、佐藤昭嗣、手塚直樹、野上建紀、長谷川祥子、堀内秀樹、村上伸之、森毅、森村健一、森本朝子、門田誠一、山本信夫氏、出光美術館、佐賀県立九州陶磁文化館の教示を得た。記して感謝したい。

(1) 時代別概観において第1の時期は、三国から南朝の時代である。この時代の古様の越州青磁は、長谷部・今井 1995によれば、日本ではまだ確認されていないが、朝鮮半島の数カ所の遺跡から出土している⁽²⁾。

第2は唐晩期，9世紀である．この時代に，矢部 1992によれば，中国北部の白磁と中国南部の越州青磁は，西は北アフリカから，東は日本にまで，輸出された⁽³⁾．

今井 1997によれば，8世紀末から中国陶磁器の日本・東南アジア・西アジア向け輸出が本格化した．越州青磁，白磁と「長沙窯磁」である⁽⁴⁾．

長谷部・今井 1995によれば，8世紀末頃から中国陶磁器の本格的な輸出が始まった．越州窯系の青磁が中心であり，唐様式の白磁と長沙窯の黄釉陶器がそれに次ぐ．これら3種は，「初期貿易陶磁」と呼ばれ，日本・東南アジア・西アジアの遺跡で出土する⁽⁵⁾．

中国学会 1991によれば，唐代，9世紀後半から，越州窯と長沙窯の青磁および中国北部の白磁は，北アフリカ，西アジア，東南アジアから日本・朝鮮にまで，海路で輸出された．中央アジアには陸路で運ばれた⁽⁶⁾．

第3は宋代である．この時代に，矢部 1992によれば，中国，とくに中国南部産の磁器輸出が増大した．しかも，11世紀半ばを過ぎると，越州窯と龍泉窯の青磁よりも白磁が優越するようになった．それに対して，中国北部の白磁の輸出は減少した⁽⁷⁾．

蓑 1998によれば，宋代の福建省・広東省の青白磁と青磁は，日本，東南アジアやエジプトに輸出された⁽⁸⁾．

長谷部・今井 1995によれば，北宋代前半期の磁器，とくに，中国北部の白磁と青磁，および，越州青磁は朝鮮で，そして，広東地方の白磁は東南アジアで，出土する．しかし，それらは日本ではほとんど出土しない．北宋代後期になると，大量の白磁が中国南部から日本に輸出された．これは，唐様式の白磁と比較すると，胎土と釉薬の質が悪く，作りも粗雑な，量産品である．南宋から元の時代には，一方では，膨大な龍泉窯青磁が日本に輸出された．他方では，福建省から，高台が施釉されない，朽葉色の青磁が，日本に輸出された⁽⁹⁾．

中国学会 1991によれば，北宋・南宋時代に，中国磁器の輸出は，前代と比

べて、地域的にアフリカ東海岸まで拡大したばかりでなく、輸出量も増加した。中心は、龍泉窯の青磁、景德鎮窯と広東省・福建省産の白磁（青白磁）であった。なお、1225年完成の一中国地理書は、中国陶磁器の輸出先としてアジアの15地域を列挙している⁽¹⁰⁾。

第4は元代である。矢部 1992によれば、元代、15世紀に、元様式の青磁と青花磁器は、北アジアから、朝鮮、日本（ただし、青花磁器はきわめて少ない）、東南アジア、インド、西アジア、さらに、東アフリカまで輸出された。顔料のコバルトは、広大なモンゴル帝国に隣接する西アジア・イスラム圏から、輸入された。内容上きわめて近く、西アジア最大の、トプカプとアルデビルの中国磁器（両者については本節（ii）を参照）は、元様式の青磁と青花磁器に始まる。1349年頃刊行の一中国地理書は、アラビア半島に至る25地域⁽¹¹⁾を、中国陶磁器の輸出先として列挙している⁽¹²⁾。

養 1998によれば、元代の福建省・広東省の青白磁と青磁は、日本、東南アジアやエジプトに輸出された⁽¹³⁾。

今井 1997によれば、元様式の龍泉窯大型青磁は、大量に輸出された。その伝世品はイスラム圏に多い。韓国新安沖沈没船引揚品（本節（iii）参照）の中では、大量生産された龍泉窯青磁が最も多く、白磁がそれに次ぐ⁽¹⁴⁾。

矢島 1996によれば、フィリピンなどで出土する、古拙な五彩磁器は、元代景德鎮の製品であろう⁽¹⁵⁾。

中沢・長谷川 1995によれば、元代の大型青花磁器は、車座で食事する習慣から、西アジア・イスラム圏に最も大きな販路を持っていた。元代・青花磁器の最大の伝世品は、トプカプにあり、アルデビルのものがそれに次ぐ。元代の青花磁器は、元様式とは異なる、簡素な文様の小品を含めると、実に広範な地域で、アジアの臨海部だけでなく、中央アジアでも、出土している⁽¹⁶⁾。

長谷部・今井 1995によれば、元代および明代初期の青花磁器は、東南アジアや西アジアには輸出されたが、日本には、沖縄を除けば、あまりもたらさ

れなかった⁽¹⁷⁾。

中国学会 1991によれば、元代の磁器輸出量は前代よりもさらに拡大した。輸出磁器の種類は、新安沖沈没船引揚品に示される龍泉窯青磁と景德鎮窯青白磁であり、さらに、それらを模造した、東南沿海地方の窯（徳化窯を含む）の製品であった。後期には、景德鎮窯の青花磁器が加わった⁽¹⁸⁾。

三上 1988(a)によれば、唐代以後、南アジア、西アジア、さらに東北アフリカにまで輸出された中国陶磁器の中で、とくに多いのは、五代、宋、元代の越州窯青磁、龍泉窯青磁と青白磁である。元代の青花磁器のうち、「精良豪華で大型の至正タイプ」は、インド以西のイスラム地域に多く残っており、主として中東地域への輸出品であった。中国風の「中型の日常用品」と「小型の儀礼用品」は、東南アジア地域で圧倒的に多い⁽¹⁹⁾。

第5は明代である。矢部 1992によれば、明代初期・永楽官様式青花磁器の器形と文様は、西アジアの影響を強く受けている。この様式の青花磁器は、トプカブとアルデビルにもあり、両者を合わせると、270個に達する。これらは、7回に及ぶ、鄭和の東南アジア・インド・西アジア大航海（西アジアへは1413年以後）の際に、永楽帝から贈与されたものであろう。当時の官窯が1982年の景德鎮の発掘で確認されたからである。ただし、上記2大コレクションの青花磁器には、明朝皇帝の年号が記されておらず、竜が文様である場合、正規の五爪ではなく、三爪が描かれている。これらの官様青花磁器は、外国贈答用を一目的として、官窯で製作された官様器皿（朝貢貿易の形式の輸出品）であった。皇帝の年号を記し、五爪竜を描いた、正規の官様青花磁器が、上記の両コレクションにはいるのは、明代中期、1500年頃以後からである⁽²⁰⁾。

矢島 1996によれば、明代中期に製作され、赤を主として用いた五彩磁器は、日本（「古赤絵」と呼ばれる）、東南アジアや西アジア（トプカブとアルデビル）に輸出された。明代中期の五彩金彩磁器（「金欄手」）は、主として日本とイスラム圏に伝世している⁽²¹⁾。

中沢・長谷川 1995によれば、鄭和の大船団に積み込まれた陶磁器は、トプカプとアルデビルの伝世品から見ると、景德鎮窯の青花磁器（両者合計で221個）と龍泉窯の青磁であった⁽²²⁾。

中国学会 1991によれば、明代初期には対外貿易が禁止されたが、入貢国家に贈与された磁器の量は、莫大であった。1383年にタイ・チャンパ（ヴェトナム中南部）・カンボジアの東南アジア3国にそれぞれ1万9千個など、である。明代中期になると、民間貿易と磁器輸出が拡大した。トプカプとアルデビルの伝世品や、カイロ旧市遺跡（本節（iii）参照）出土品が名高い。アルデビル伝世品の中には、官款を持たないが、官款を持つ器物と基本的に一致する磁器がある。これを焼造した景德鎮民間窯の水準は、官窯に劣らなかったのである。スワトウ・ウエアと呼ばれる明代粗質磁器は、中国南部の広い地域で生産された輸出磁器で、潮州から船積みされた。これらの磁器の胎はかなり厚く、凶案の筆法は粗野である。時にはアラビア文字が書かれているが、その文字はしばしば誤っている。鄭和の船団が磁器を交易したのは、随行者の記録では、東アフリカのソマリアに至る28地区であった⁽²³⁾。

第6に、明代末期・清代初期には、どうであったか。

矢部 1992によれば、明代後期の16—17世紀に、景德鎮系の「呉州」五彩磁器は、日本から東南アジアまでの広い地域に、大量に輸出された。それに対して、西方世界の王侯・富豪を魅了したのが、万曆民間様式（「芙蓉手」）青花磁器であった。これは、景德鎮窯の大量生産品であり、かつ、大作であった。新興の清朝は、鄭成功などの、中国南部の清朝抵抗勢力を封じ込めるために、1656年に外国貿易を禁止し、61年にはそれをさらに強化した。1684年の鄭氏の降伏と清朝鎖国令の廃止まで、景德鎮磁器の輸出は減少したであろう。日本に輸入される中国磁器は、1637年に頂点に達した。中国船だけで75万個も輸入したのである。しかし、その後は減少の一途を辿り、1650年代になると微量になった⁽²⁴⁾。

西田・出川 1997によれば、「芙蓉手」の第3期、1600年頃の精緻な作品

は、ヨーロッパに少なく、アルデビルやトプカブに多い。独特な雰囲気を持つ、明代末期・清代初期の呉州手磁器（スワトウ・ウエア）大皿・壺類は、17世紀初頭までは、数は多くないけれども、中近東からヨーロッパまで輸出されていた。しかし、その後、呉州手磁器は東南アジア諸国を主要な市場とするようになった⁽²⁵⁾。

中沢・長谷川 1995によれば、明代末期、16世紀末に始まった「芙蓉手」青花磁器は、主としてヨーロッパへの輸出品であった⁽²⁶⁾。

長谷部・今井 1995によれば、16世紀末から、豪華な芙蓉手青花磁器が日本・西アジア・ヨーロッパへ大量に輸出された。福建省では、「呉州手」磁器（青花および五彩）が、日本・東南アジア・西アジア向けに大量生産された。1615年に豊臣方によって焼き払われた大阪府・堺環濠都市遺跡出土の中国磁器は、1613年に大西洋、セント・ヘレナ島沖で沈没した、オランダ連合（あるいは合同）東インド会社（以下では VOC と略記する）貿易船、ヴィッテ・レーウ号の引揚品と類似している。徳川幕府の鎖国政策と肥前磁器の生産開始によって、日本の中国磁器輸入は減少した⁽²⁷⁾。

中国学会 1991によれば、明代後期には磁器輸出货量は、陸路による北アジア諸国への輸出を含めて、一層増大した。ヨーロッパ向け輸出の開始も増大の一要因である。清代初期には、貿易禁止令が公布されていたが、現実には密貿易が盛んに行なわれていた。例えば、1673年にマカオから出港した3隻の密貿易船は、合計して5万個以上の磁器を積み込んでいた。貿易禁止令の撤廃後、民間貿易による大規模な磁器輸出が行なわれた。17世紀末にヨーロッパ向けの磁器輸出は頂点に達した。景德鎮窯磁器の外に、南部海岸地方の窯（徳化窯など）の磁器も東南アジアに輸出された⁽²⁸⁾。

(2) アジア・アフリカを東アジア・南シナ海海域とインド洋海域に分けて、磁器貿易の特徴を紹介する。

17世紀までの約1千年間の東アジアの陶磁器貿易は、亀井 1997(a)によれば、一極放射線型から多極交差線型に変化した。まず、8世紀後半に始まる

陶磁器貿易において、施釉陶磁器の生産をほぼ独占する中国が、主導権を掌握していた。「初期貿易陶磁器」の越州窯青磁、長沙窯「青磁」と河北省産白磁、それらに広東省の粗製青磁を加えた一群は、11世紀頃まで、「セットを組んでいるかのごとく」まとまって、中国の少数の輸出港から輸出された。このような一極放射線型貿易構造は13—14世紀に多極交差線型に変化した。中国国内では、福建・広東・江西地方の窯業の勃興、龍泉窯の隆盛に示されるように、輸出陶磁器の生産量が増大し、また、輸出港の数も増加した。さらに、中国以外でも輸出陶磁器が生産されるようになった。11世紀以後の高麗青磁や、14世紀以後のタイ・ヴェトナム陶磁器である。この動向に一層拍車をかけたのが、自らは陶磁器を生産しない中継貿易国家の出現である。東の琉球と西のマラッカがその代表的存在である⁽²⁹⁾。

16世紀に至る、南シナ海海域の陶磁器貿易について、青柳 1995；青柳 1999は、指標的な遺跡とその出土品を次のようにとりまとめている。

(a) 9—10世紀。指標的な遺跡は、マレー半島地狭部陸送ルートに当たる、タイ南部のコーカオ島遺跡とポー岬遺跡であり、特徴的な出土品は、中国の初期貿易陶磁器3種（長沙窯「黄釉磁」あるいは「多彩釉陶」、越州窯青磁、河北省産白磁）とイスラム青釉陶器である。イラク・バスラ産と考えられる、このイスラム陶器は、タイ、ヴェトナム、フィリピン、中国の揚州・福州、日本の鴻臚館・太宰府（さらにマレーシア）でも、中国の初期貿易陶磁器3種とともに出土する。陶磁器貿易の開始期において、交易の主体はアラブ系商人（おそらく、ペルシア湾シーラーフ港を拠点とする商人）であったであろう。

(b) 10—11世紀。指標的な遺跡はフィリピン・ミンダナオ島のバランガイ遺跡であり、特徴的な出土品は、広東省の青磁と白磁である。これらの陶磁器は、マレーシア、ブルネイ、タイ、ヴェトナム、日本（博多）でも出土するから、広州港を拠点として、東南アジアに進出した広東系の商人によって、船載されたものであろう。

(c)12—13世紀. 指標的な遺跡はフィリピン・パラワン島のアビオグ洞穴遺跡であり, 特徴的な出土品は, 福建省の青磁と鉄彩大壺である. 前者はブルネイ, マレーシア, タイで出土し, 後者はフィリピン, マレーシア, ブルネイで出土する. 福建省の陶磁器は同省の泉州から輸出されたために, 福建商人の海外進出がこの頃から盛んとなった.

(d)13—14世紀. 指標的な遺跡はフィリピン・マニラ市のサンタ・アナ遺跡であり, 特徴的な出土品は, 福建省の彩釉陶器と白磁器(徳化窯)および浙江省龍泉窯青磁を中心とし, 少数の江西省景德鎮窯青花磁器をも含む. これらの貿易陶磁器の出土地と出土量はこの時期に激増する. 上記の組み合わせの貿易陶磁器は, 「南シナ海海域のほぼ全域に……流通している」. これらを輸出する泉州港は, 「世界最大の国際貿易港」となった.

(e)15世紀. 指標的な遺跡はフィリピン・パラワン島のパンダナン沖沈没船であり, 引き揚げられた陶磁器は, 中国と東南アジアの陶磁器である. 前者は景德鎮窯青花磁器と龍泉窯青磁であり, 後者はタイ, ヴェトナムおよびチャンパの陶磁器である. 明代初期以来の海外渡航禁止政策のために, 中国磁器の輸出は制限され, 東南アジアの陶磁器が中国磁器の代替品として南シナ海海域に登場したのである.

(f)15—16世紀. 指標的な遺跡はフィリピン・ルソン島のカラタガン遺跡であり, 特徴的な出土品は, 多くの景德鎮窯青花磁器と少数のタイ・ヴェトナム陶磁器である. この組み合わせはブルネイやマレーシアでも認められる. 青花磁器は, 14世紀に登場するが, 15世紀から中国貿易陶磁器の主流を占めるようになった. タイ・ヴェトナムの陶磁器の多くは, 中国商人が宋・元代以来張り巡らせた交易網を通して, 輸出された. 明朝海外渡航禁止令の撤廃(1571年)とともに, それらは中国磁器に取って代わられた⁽³⁰⁾.

(3) インド洋海域. 佐々木達 1995によれば, 9世紀の中国陶磁器は, メソポタミアで, また, エジプトでも, さらに, 東西両世界を結ぶスリランカでも, 出土した. それに対して, 東方に運ばれたイスラム陶器は, 9—10世紀

のものだけである。メソポタミアでは、中国の白磁を模造した白釉陶器も、同じ時期に作られていた。10—11世紀におけるメソポタミア・アッバス朝の衰退とエジプト・ファーティマ朝の興隆につれて、中国陶磁器は、ペルシア湾岸の遺跡から激減し、紅海沿岸で出土しはじめる。エジプト出土の宋・元代白磁・青磁には、優品が多い。14世紀に入ると、ペルシア湾岸の港湾遺跡から出土する中国陶磁器の量も、莫大となった。「元、明時代の青磁と染付は、どこからでも発見される」。中国磁器の大量輸入は、青磁の場合、エジプトの青釉陶器とイランの青釉・緑釉陶器の模倣を、青花磁器の場合、イランの白釉藍彩陶器の模造を、流行させた⁽³¹⁾。

佐々木達 1993によれば、西アジアと中国という「東西の大きな地域間のルートが商業的に利用されたのは、……8世紀後半から」である。この頃から中国陶磁器は、アラビア、イランとインドの商人によって西アジアまで運搬される貿易品となったのである。中国陶磁器の中で、9—10世紀には浙江省の青磁、広東省の青磁と灰釉陶器、河北省と河南省の白磁、湖南省の長沙窯彩画陶器などが目立つ。11—12世紀には広東省、福建省、江西省の白磁が、13—14世紀には浙江省の青磁が、15世紀には、浙江省などの粗質の青磁が、多くなる。青花磁器と五彩磁器の輸入増加は、明代、とくに清代からである。出土する中国陶磁器の種類を見ると、「西アジア地域に特徴的な傾向がある」。東南アジアに多く出土する水注（ケンディ）や、東アジアで喫茶のために好まれた黒釉陶器碗（天目碗）は、西アジアでは皆無に近い。「西アジアに輸出された中国陶磁器は主に南中国で生産された陶磁器の一部で、西方への輸出に適した南中国の港に近い地域で大量生産された製品であった」。西アジアに輸出された中国陶磁器は、主として飲食用の碗と皿である。トプカプの大型品・優品は特殊な事例であり、一般の出土品は小型である。陶磁器は、「貿易品全体の中で考えると、それほど大きな割合を占めていなかった」。つまり、西アジアの中世遺跡から出土する陶磁器は、現地産を主とする土器が圧倒的に多く、輸入品は、目立つけれども、量的には少なく、数%以

下である（その比率は、日本の中世城館出土品に占める中国磁器の割合よりも低い）。「しかし、腐らないために遺跡に多量に残り、そのために歴史を読み解く資料として重要になった」のである。中国陶磁器は、輸入量がごく小さい時代には、西アジアで模倣された。「イランよりも遠いエジプトで、中国陶磁器の模倣度がより高い」。しかしながら、エジプトにおける模倣も11世紀から14世紀までである。この期間のエジプトでは、中国陶磁器は、土器と金属器の中間に位置付けられ、上流から中流の社会階層によって、金属器と併用されたであろう。14世紀以後は、エジプト陶器は、豊かな色彩と文様のものとなり、その器形はエジプトの金属器に類似してくる。中国磁器は、14世紀以後一層大量に輸入され、「16世紀からは誰でも使う普通の食器になった」けれども、エジプト陶器は、中国磁器の影響から離れたわけである⁽³²⁾。

坂井 1998によれば、17世紀のインド洋海域で活発な磁器交易があった。インド南東部ゴールコンダ王国の船が、インドネシアのアチェやバンテンからもたらされた中国磁器を、1614年に同王国の港からモカに運んだ。1637年から翌年にかけてムガールの商船はスラットからモカへ磁器を送った。1646年には、アチェの船がスラットへ磁器を運び、オランダ、ゴールコンダ、アチェ、イギリス船が大量の中国磁器をモカへ運んだ。1664年にインド南西部・ヴェングルラ港からイスラム船18隻が1600個の磁器をモカにもたらした。モカは、オスマン帝国の紅海・インド洋貿易の拠点として磁器を必要としていた。1672年にスラットに中国磁器を運んだのは、イギリス船（マレー半島のクダーから）、「アルメニア船」（タイのアユタヤから）、フランス船（バンテンから）と、アチェからの船である。1680年にはイギリス船が、中国磁器を積んで、アユタヤからスラットに向かった。1680年と翌年にはイギリス船とフランス船が、バンテンから中国磁器をスラットにもたらした。1682年にフランス船はバンテンから、スラットとベルジャに中国磁器を運んだ。1644年頃スラットの商人は毎年1—2隻の船をアチェに派遣し、磁器を

購入していた⁽³³⁾。

(注)

- (1) 「唐白磁と通称されるストーンウェア」(三上 1988(b), p. 80)がある。大英博物館 1974によれば、唐代「白磁」のうち、単色図版33—35, 54(北宋)はストーンウェアであり、原色図版6, 18と単色図版36—38はポーセリンである。また、元代までの青磁はストーンウェアである(原色図版48と単色図版105, 131—134, 136)が、清・康熙代の青磁の中にはポーセリン(単色図版231, 232)がある。
- (2) 長谷部・今井 1995, p. 95. 具体的には、4世紀について、青磁硯・瓶・碗の破片(ソウル市・城跡, 岡内 1997, p. 119; 門田 1993, p. 51); 青磁壺の完器・破片(ソウル市・古墳群, 岡内 1997, pp. 119, 121; 門田 1993, p. 53); 羊型青磁(江原道・墳墓, 岡内 1997, p. 121; 門田 1993, p. 54); 青磁壺(忠清南道・墳墓, 岡内 1997, p. 121; 門田 1993, p. 54)であり、6世紀について、青磁壺2個と白磁灯明皿5個(忠清南道・百濟武寧王陵, 岡内 1997, pp. 122, 124; 門田 1993, pp. 56, 59); 青磁碗(慶尚南道・墳墓, 岡内 1997, p. 124); 青磁壺破片(全羅北道・墳墓, 岡内 1997, p. 124; 門田 1993, pp. 54, 56); 青磁壺破片(忠清北道・祭祀遺跡, 岡内 1997, p. 124; 門田 1993, p. 56); 白磁破片17(ソウル市・古墳群, 門田 1993, p. 53)である。さらに、三上 1987, pp. 76, 82, 94, 101, 116を参照。
- (3) 矢部 1992, pp. 140, 142, 158. さらに、蓑 1998, p. 101を参照。
- (4) 今井 1997, pp. 101-103. 長沙窯の製品は、ここでは青磁の一種とされているが、矢部 1992, pp. 140-141; 長谷部・今井 1995, p. 99では、黄釉陶器と規定されている。三上 1988(a)によれば、「長沙……窯磁」の「焼成火度は1200度前後までであって、ストーンウェアの範疇に属する」。「東アジアにおいて陶磁器を彩画や彩文で飾る方法は、低火度焼成の土器の場合には、戦国・漢・唐の加彩陶器が存在するけれども、高火度焼成の施釉陶磁器の釉下彩画・彩文の場合は唐代晚期にはじまる」。この「釉下彩磁」をとくに目覚ましく発展させたのが、長沙窯であった。三上 1988(a), pp. 109-110.
- (5) 長谷部・今井 1995, p. 99. 三上 1987などによれば、9—10世紀の河北省諸窯の白磁、越州窯青磁と「長沙……窯磁」は東アジアから近東地域にまで輸出された。三上 1987, pp. 45, 157, 342(広東省諸窯の白磁・青釉磁などもある); 三上 1988(a), pp. 16-17; 三上 1988(b), p. 133.
- (6) 中国学会 1991, pp. 207-208, 283.
- (7) 矢部 1992, pp. 168-174.
- (8) 蓑 1998, pp. 120-123.
- (9) 長谷部・今井 1995, pp. 105-107, 110-113.
- (10) 中国学会 1991, pp. 280-285.
- (11) 中国学会 1991では、50余りの地域とされている。中国学会 1991, p. 322.
- (12) 矢部 1992, pp. 277-279, 283-284, 300-306.
- (13) 蓑 1998, pp. 120-123.

- (14) 今井 1997, pp. 131-133.
- (15) 矢島 1996, pp. 87-88.
- (16) 中沢・長谷川 1995, pp. 101-102, 104-105, 122.
- (17) 長谷部・今井 1995, pp. 121-122, 124. なお、沖縄出土の元様式青花磁器については、本節 (iii) を参照。
- (18) 中国学会 1991, pp. 307, 321-323.
- (19) 三上 1988(a), pp. 48-49, 143-144, 148-150. なお、三上 1987; 三上 1988(a)によれば、世界に遺存する、元様式青花磁器の完形品、あるいは、それに近い器物は、5百個を超えない。1960年代には2百個以下と推定されていた。三上 1987, p. 208; 三上 1988(a), p. 141. それに対して、中国国内で発見された元代青花磁器は、百個に満たない。三上 1988(a), p. 144. また、メドレー 1981によれば、元代青花磁器は2百個あまりが、中国以外で発見されており、その3分の2以上は大皿である。それに対して、中国では大皿は数個しか発見されていない。メドレー 1981, p. 271.
- (20) 矢部 1992, pp. 318-320, 328-334.
- (21) 矢島 1996, pp. 109-110, 113, 117, 121-122, 124.
- (22) 中沢・長谷川 1995, pp. 107, 119-120.
- (23) 中国学会 1991, pp. 363-366.
- (24) 矢部 1992, pp. 383-387, 409-410, 412, 416-417.
- (25) 西田・出川 1997, pp. 99-100, 133, 135.
- (26) 中沢・長谷川 1995, p. 136.
- (27) 長谷部・今井 1995, pp. 128-129.
- (28) 中国学会 1991, pp. 364-366, 397-398.
- (29) 亀井 1997(a), pp. 77-78.
- (30) 青柳 1995, pp. 98-107; 青柳 1999, pp. 55, 57, 59.
- (31) 佐々木達 1995, pp. 117-118, 122-124, 126-127. 三上 1988(a)によれば、南アジア以西に運ばれた中国陶磁器は、13世紀には龍泉窯青磁、景德鎮窯白磁・青白磁、福建・広東諸窯の白磁を中心としているが、遺跡出土量は一般的には多くない。14世紀になると、出土量が格段に増加する。景德鎮窯の青花磁器よりも龍泉窯系の青磁が多い。白磁は青花磁器よりも少ない。三上 1988(a), pp. 191-192. 中国陶磁器のなかで、「西アジアや南アジアで流行した」ような「釉下彩陶磁の文様や文様構成から見て」、唐代後期の「長沙……窯生産の積極的な目標が貿易陶磁生産にあったことは確かであろう」。三上 1988(a), pp. 110, 112. 「広く全アジアの地に」輸出された、9世紀の「長沙……窯磁」が、エジプトで発見されないのは、当時の陶磁器貿易を独占していたペルシア商人が、越州窯青磁に比較して低廉な長沙窯製品を、陸路でエジプトに送ることをしなかったからであろう。三上 1988(b), pp. 105-106, 138.
- (32) 佐々木達 1993, pp. 99, 101-110. 三上 1988(b)によれば、エジプト陶器の7-8割が中国陶磁器の模倣品である。それらは、中国陶磁器が輸入されるとすぐに、作られている。しかし、15世紀の中頃から青花磁器の模倣品の模様はエジプト的なものに変化した。三上 1988(b), pp. 15-16, 38-39. これとは、やや異なった評価もある。エジプトに

における中国磁器の模造は18世紀まで続いた。三上 1988(b), p.23. 「どの時代でもエジプト陶器の7-8割までが、中国陶磁のコピー」である。三上 1987, p.61. それに対して、弓場 1990によれば、中国陶磁器は9, 12-13, 15世紀のイスラム陶器に大きな影響を与えた。しかし、この写しは「イズニーク陶器の中ではごく一部」であり、しかも、同時代ではなく、150年から2百年前の中国陶磁器がイスラム圏で写された。弓場 1990, pp.60, 63.

(33) 坂井 1998, pp.73-75.

(ii) 一括伝世品

ここで一括伝世品とは、アジア・アフリカで18世紀前半までに大量に収集され、伝世している中国磁器を指し、後代の収集品を含めない。

(1) トプカプ宮殿旧蔵品。これは、オスマン帝国の廃止(1922年)までトルコ皇帝の所蔵品であった。トプカプ 1987(1)とトプカプ 1987(2)は、その全貌を「初めて明らか」にした著作であり、「これまでの研究の集大成」である⁽¹⁾。そこで、これをまず紹介する。

この中国磁器収蔵品は、「10,000点をはるかに超え、現存最大最古のもののひとつである」。それは、「オスマントルコ帝国が幾世紀にもわたって君臨した中東の領土における収集活動の遺産」である⁽²⁾。

この収蔵品の目録作成と展示準備のために、「ドレスデンのヨハンネウム……の陶磁コレクション主任⁽³⁾エルンスト・ツィンメルマン」が招請された。彼は1925年と27年にも調査・分類を行なった。収蔵品の「全容を概観させる意図」の下に、トプカプ博物館の大広間2室の陳列ケースと壁面は、7千個余りの磁器によって埋め尽くされた⁽⁴⁾。展示方式は1970年に変更され、選び抜かれた約1500個⁽⁵⁾だけが、陳列されることになった⁽⁶⁾。

5百年に亘る「この歴大なコレクションがいかにして集められたかという基本的な問題」は、なお不明である。献上品・戦利品や、一種の「相続税」による徴収品が、中心であろう。この収蔵品の「最もきわ立った特性」は、「古い由緒と、途絶えたことのない継続性」であって、「これに匹敵し、あるいは凌駕し得るものは、……旧中国宮廷コレクションのみであろう」。「ザク

セン選帝侯のアウグスト強王がドレスデンで作ったコレクションは、……量においてたしかに比肩し得たが、これとてもおもに18世紀はじめの短い期間にかき集めたもので、範囲の広さ、種類の多さでは比すべくもなかった⁽⁷⁾」。

トプカプの中国磁器は、13世紀から20世紀初期まで、およそ6世紀に及ぶ。しかも、それらは、「少数の例外は別として、特に輸出用に作られた品」である。それらは「下等品……とは限らない」。むしろ、「より古い時代では、輸出用陶磁は国内用あるいは時には宮中用のものとも区別がつかないほどである」。ただし、ごく少数の「弘治」銘白磁器・黄釉磁器は明朝皇帝からの贈与品であろう⁽⁸⁾。それらは、龍泉窯青磁（時代的に最も古く、価値の高い、そして、数も多い）と、景德鎮窯の諸種の製品である。中国南部の地方窯とヴェトナムの製品は「150点そこそこ」である（私の単純計算では173個）。タイ産は1個もない。内訳は元代青花磁器40、明代初期青花磁器54、明代初期白磁器31⁽⁹⁾、明代中期青花磁器288、明代中期五彩・単色釉磁器43⁽¹⁰⁾、明代後期青花磁器2308、明代後期五彩・単色釉磁器291⁽¹¹⁾、元代青磁406、明代青磁944、清代初期の作品として青花磁器2680、釉裏紅磁器16、単色釉磁器370、五彩（ファミリーユ・ヴェルト）226、「伊万里」様式693、単色釉地五彩磁器974、粉彩と「その後の」五彩磁器527、19—20世紀初期の清朝陶磁器294、さらに、明代後期の「スワトウ・ウェア」（加彩と単色）148、清代の徳化窯製品14、その他11（15—16世紀のヴェトナムの青花磁器3、青磁4、明代後期の「マルタバニ・ウェア」3、清代の宜興窯製品1）、合計10,358個である⁽¹²⁾。

大部分が大型品であり、宮廷の実用品である、これらの収蔵品の大きな特徴は、以下のとおりである。第1に、青磁（主として13世紀後期から15世紀後期までの龍泉窯製品）が非常に多く⁽¹³⁾、製作年代の幅も広い。新安沖沈没船引揚品との比較から、ここの「数百点が間違いなく元時代中期」と確定された⁽¹⁴⁾。第2に、明代の諸種の作品がきわめて多い。とくに、最初期すな

わち元代・明代初期の青花磁器が百個に近く、「これに比肩し得る作品群としてはイランのアルデビル寺院関係のものだけであろう⁽¹⁵⁾」。明代初期の無文の白磁器には、最高級品が含まれる。世界的に貴重な金襴手も多い⁽¹⁶⁾。さらに、芙蓉手と過渡期様式にも、すぐれた作品が多い。第3に、「清の陶磁が全コレクションの半分以上を占め、それが従来コレクションより様式の変化に富む一方、当時の製品の種類としては網羅的ではない」。中国の「輸出向け生産が(ヨーロッパ向けも加わって——松尾)今や複雑化し多様化したため、このコレクションが或る点ではその頃のほかのコレクション、ことにヨーロッパでのそれとはかなり性格を異に」することとなった。「清時代初期で群を抜いて多い」のは、青花磁器の佳品であるが、18世紀半ば以後その人気は衰えた。単彩釉は17世紀に流行し、「青、青磁色、茶、白」が好まれた。18世紀第1四半期には五彩(famille verte)、次いで粉彩(famille rose)の輸出が増加した。このうち1725—50年頃には、日本の磁器に倣った、「染付、赤、金を基調」とした、華麗で、混血的な「伊万里」様式が、増大した。しかし、この種の文様で日本を模したものは少なく、「文様の範囲はきわめて広い」。『伊万里』様式はその後は「ほとんど全く無くなる」。それよりも多いのは、「青または茶の釉の地を広くとり、その上におもに金彩の文様を加えて、意匠の効果を高めた」、豪華な五彩磁器、粉彩磁器と「赤絵金襴手」である。18世紀後半には、「ヨーロッパの好み次第に他を圧して行く」が、収蔵品は「全体で300点に達せず、過去の水準から見ると取るに足りない⁽¹⁷⁾」。さらに、トプカプとアルデビルの元代青花磁器には類似品が多い。いくつかの作品には「同じ所蔵者名の刻銘がある⁽¹⁸⁾」。

元・明代の青花磁器を見ると、トプカプの「デビッド式瓶」は、他の中東やインドにあるものと同じく、そして、東南アジア輸出品と異なって、「元時代における景德鎮の製陶の主系を代表する」(イギリス・デイヴィッド財団所蔵「至正十一〔1351〕年」銘竜水図大瓶は元様式青花磁器の基準作である——松尾)。15世紀初期の青花磁器の様式変化は、トプカプの49個の青花磁

器に代表される⁽¹⁹⁾。景德鎮の明代初期白磁器の文様は、一般に「同じ器形の青花の文様を模している⁽²⁰⁾」。15世紀末期以後の景德鎮製品の大量輸出に伴って、従来とは異なった青花磁器も作られた。アラビア文字入り「正徳」銘青花磁器鉢は、「この種のものとしては……（トプカプで）最も古い⁽²¹⁾」。「IHS」（キリスト教の象徴）銘盤、ポルトガル国王マニュエル一世（1521年没）の紋章付き鉢や、ポルトガルのマラッカ総督⁽²²⁾の名と1541年とを記した鉢も、ある。これらは16世紀初頭のアラビア文字入り「正徳」銘磁器と酷似している⁽²³⁾。16世紀中期の「グロテスク文様」と「魔法の噴水図」は、「中国の状況では極めて異例」である。これらの起源はイタリアである可能性がある⁽²⁴⁾。「区劃文様」磁器＝「クラーク・ウェア」（芙蓉手、万暦民間様式）の生産は、16世紀第3四半期頃に始まり、佳品は17世紀初期まで、粗品は明代末期まで作られた。このような「パネル文器は一括して「クラーク・ウェア」と呼ばれて来たが、この言葉は一定の時代を特定するものでも、一定の窯の製品をさすのでも、はっきり定義付けられたタイプの陶磁器を言うものですらなく、あまり役に立つ言葉ではない。それは実際のところ明末清初のすべての種類の輸出器にあてはまる言葉である⁽²⁵⁾。パネル文器の文様と過渡期磁器のそれは、同じ特徴を持つ。とくに、写實的・ヨーロッパ的な「チューリップ文様」は、VOCを通じて中国磁器の文様となったものであろう⁽²⁶⁾。過渡期製品の最も重要な参考資料は、崇禎12（1639）年銘の山水柳下人物文鉢（北京・中国歴史博物館）である。「これは明確な年記ある唯一の過渡期作品で、過渡期青花全体の年代判定の鍵となるものである」。年代においても、絵画様式においても、また画題においても、干支を記した⁽²⁷⁾、或いは記していない、人物文過渡期作品のグループにぴったりあてはまり、このグループ全体が明末の製であることを疑うべくもなく立証する。「明末説を更に証拠立てるのは……南シナ海の難破船（この「ハッチャー・カーゴ」については本節（iii）を参照）である。その積荷はおもに17世紀中期を下限とする、末期の下等なタイプのパネル文器と、人物文または花文の過渡期作品

であった。うち2点は1643年にあたる干支の年記があり、かなりの数のものに明後期のパネル文様式、過渡期様式の要素を混合した文様がある。「このように相互に関連したやきものの積荷に対し17世紀末あるいは18世紀はじめを想定するのは無意味であろう⁽²⁸⁾」。

他の著者の見解を見てみよう。矢部 1992によれば、トプカプの約8千個の中国陶磁器は、アルデビルのそれと「おどろくほど共通する傾向」を持っている⁽²⁹⁾。

西田・出川 1997によれば、アルデビルと同じように、ここにも、15世紀末以後のポルトガル向け磁器（1552年と発注者アルヴァレスの氏名とが記された瓶など）、精緻な芙蓉手と呉州手青花磁器が含まれる⁽³⁰⁾。

矢島 1996によれば、明代中期の五彩金彩磁器（「金欄手」）の伝世品は約2百個あるが、そのうちの約50個がトプカプに納まっている⁽³¹⁾。

中沢・長谷川 1995によれば、トプカプの中国陶磁器は、総計1万個を超える。この元代青花磁器は、伝世品として世界最大であり、39個に及ぶ。永楽様式青花磁器は、アルデビル霊廟よりも少ないとしても、49個あり、その一部は、アラビア文字を文様としている⁽³²⁾。

弓場 1990によれば、中国磁器は10357個で、とくに、元代青花磁器（40個）は「優品ばかり」であり、明代初期青花磁器（約50個）は「最高級の作品」である。オスマン帝国成立以前に、大量の優れた中国磁器がティムール帝国など中近東地域に運ばれていた。これらがトプカプの基礎となったと考えられる⁽³³⁾。

三上 1988(b)によれば、トプカプの中国磁器は10512個である（かつては約8千個とされていた）。少なくとも32個の元代青花磁器は、「32点を保有するアルデビル廟のそれとならんで、量質ともに最もすぐれたコレクション」である。トプカプの元代・明代初期の中国陶磁器の種類、器形と文様は、「アルデビル廟のコレクションと符節を合するように類似する」。しかも、「両コレクションの中に、蒐集に先立つ14—15世紀のものが存在することは、コレク

ジョンのはじまるかなりの前から、この方面に多数の優品が輸入されていたことを物語る。清朝磁器は、5千個を超える。しかも、時代的には康熙期から18世紀末までに限られるから、「これは清朝前半期の中国陶磁のもっとも大規模なコレクション」である⁽³⁴⁾。

(2) アルデビル霊廟旧蔵品。これは、矢部 1992によれば、ペルシア帝国サファヴィー朝の第5代皇帝アッバースが、同霊廟に1611年に奉納した、1.1千個余りの中国磁器である。これは、その大半に奉納者名が刻まれており、奉納に関する同時代文献も存在するために、「陶磁器の史料としては稀有な存在」である。この旧蔵品は、14世紀、元代ないし元様式の龍泉窯の青磁と景德鎮窯の青花磁器に始まり、寄進時代に至る明代磁器の代表作を、もちろん、大量の芙蓉手（万暦民間様式）青花磁器を、含んでいる。さらに、「大明弘治」銘の官窯五彩磁器もある⁽³⁵⁾。

西田・出川 1997によれば、ここの中国磁器は、トプカブで言及したものと同一種類を含む⁽³⁶⁾。

矢島 1996によれば、ここには明代中期の官窯および民間窯の五彩磁器もある。その中には、「大明嘉靖」銘を赤絵で覆った民間窯作品が含まれる⁽³⁷⁾。

中沢・長谷川 1995によれば、元代青花磁器の伝世所蔵品において、トプカブに次ぐのが、アルデビルの32個である。また、ここの永楽様式青花磁器の所蔵品は、トプカブよりもはるかに多く、172個に達する⁽³⁸⁾。

岡野 1993によれば、同霊廟は、サファヴィー朝の祖先の廟である。ここの旧蔵品の大部分は、テヘランのイラン国立博物館に移されたが、まだ44個（青花磁器40、青磁2など）がアルデビルに残されている。タブリーズ博物館に移されたのは、20個（青花磁器15、白磁器・五彩磁器各2など）である⁽³⁹⁾。

メドレー 1981によれば、トプカブとアルデビルの中国磁器は、いずれもイスラム的な嗜好を反映した、複雑な文様の作品を多く含む。しかし、両者に

は違いもある。すなわち、アルデビルには、中国の絵手本に明らかに影響された、やや後代の、作品が多い⁽⁴⁰⁾。

三杉 1976によれば、アッバス帝は1162個を1611年に、銘文を刻んで⁽⁴¹⁾、祖先の霊廟に奉納した（一部は漆器・玉器であった）。1千個以上が中国磁器であったであろう。そのうちの3—4百個は破損・散逸した。残った磁器が1935年にテヘランに移された。青花磁器618（14世紀のもの37）、白磁器80、青磁58、五彩磁器23、黄磁16、など805個である。同時に、37個はイスファハーンに、19個はタブリーズに運ばれた。アルデビルに残された中国磁器は、82個分の破損品など木箱一杯の破片であった。元代青花磁器と金襴手との破片、さらに、康熙代（アッバス帝よりも半世紀後）の五彩金彩磁器破片3も含まれる。後者は、アッバス帝以後にも同霊廟に磁器が奉納されたことを示すであろう⁽⁴²⁾。

（3）マシュハド副王旧蔵品。これは、岡野 1993によれば、かつてイラン・マシュハド地方を支配していた副王の収集品、32個（青花磁器19、青磁5、清朝洋彩磁器8）であり、現在は同地の博物館にある⁽⁴³⁾。

三杉 1976によれば、メシュッド副王の収集品は約50個であり、龍泉窯青磁10個（少なくとも8個は元代）、16世紀を中心とした青花磁器19個、さらに、清代五彩磁器17個が含まれる⁽⁴⁴⁾。

（4）デリー王宮所蔵品。これは、三杉 1986によれば、インド・ムガル皇帝旧蔵品であり、14—15世紀の龍泉窯青磁9個、15—18世紀の景德鎮窯青花磁器6個を含む⁽⁴⁵⁾。

（5）ジャラン家所蔵品。これは、三杉 1976によれば、インド・パトナの同家がムガル帝国時代に収集したものである。数百個の青磁、白磁器、青花磁器などが、「三部屋にあふれ」るように陳列されている⁽⁴⁶⁾。

（6）ムルシダバード藩王所蔵品。これは、三杉 1976によれば、インド・ベンガル州のムルシダバード藩王居館に所蔵されているものであり、青磁約30個と青花磁器数個を含む⁽⁴⁷⁾。

(注)

- (1) 高橋 1991, pp. 40, 42.
- (2) トブカブ 1987(1), p. 6.
- (3) トブカブ 1987(1), p. 7では、「ドレスデンの国立陶磁コレクション……館長」とされている。トブカブの中国陶磁器に関する「最初の学問的出版物は、それを分類し、展示用に整理したツィンメルマンの簡単な目録である」(1930年刊)。「この目録により……西洋の専門家たちがコレクションに注目するようになった」。ツィーマーマンは、トブカブの中国陶磁器が、「北京の故宮以後世界最大の中国陶磁コレクション」であり、「ドレスデンのコレクションよりも、多くの点で比較にならないほどすぐれている」と記している。トブカブ 1987(2), pp. 5-7. さらに、トブカブ 1987(1), pp. 5, 7を参照。ツィーマーマンの「有名な著書」は、「元・明の陶磁の研究が当時是非常におくれていたせいも」あって、「今日の立場から見れば、重大な欠陥がある」けれども、「多くの点で重要な案内書であった」。トブカブ 1987(1), p. 7. なお、ツィーマーマンの名、「エルテスト」(高橋 1991, p. 42)、「エルストーン」(三杉 1981, p. 160)と「エルンストーン」(三杉 1976, p. 169)は、エルンストの誤植である。
- (4) トブカブ 1987(2), pp. 4-5. 弓場 1990によれば、ツィーマーマンの調査は「1906年、1924年、27年の3回」にわたった。その結果は1930年に大冊の報告にまとめられた。これに収録された図版は、「コレクションの1パーセントにも満たない。しかし、……重要な作品はおおむね収録されて」いる。弓場 1990, p. 49. 三上 1988(b)によれば、ツィーマーマンの最初の調査は1910年に行なわれた。「彼は当時、ドレスデンのツピンガー宮殿の陶磁館 (Johanneum) の館長であった」。「ケースはもとより、壁面や柱をも利用し、四千点を越える中国陶磁がおり重なるように展示されるようになったのはチンメルマン氏の努力の結果である」。三上 1988(b), pp. 173-174. なお、この文章の「ツピンガー宮殿の陶磁館」は誤りである。当時の磁器博物館はヨハネウム宮殿にあって、それがツヴィンガー宮殿に全面的に移ったのは、第二次大戦後である。ヨハネウム宮殿とツヴィンガー宮殿とは、ドレスデンの宮城から見て、ほぼ反対方向にある。
- (5) 内訳は青磁194個、青花磁器その他1299個である。トブカブ 1987(2), p. 7. なお、トブカブ 1987(2), p. 18の「ファッガーズ Fuggers 商会」は、フッガー商会あるいは同族会社(南ドイツ)の誤植であろう。
- (6) トブカブ 1987(1), p. 7.
- (7) トブカブ 1987(1), pp. 9-11. なお、「ザクセン侯・アウグスト強王が……狂喜したという、いわゆるグレナディア・バーズ……(擲弾兵瓶)」(トブカブ 1987(2), p. 32)は、ドレスデンでは竜騎兵の瓶と呼ばれる。
- (8) トブカブ 1987(1), pp. 15, 37.
- (9) トブカブ 1987(1), p. 25では30個。
- (10) 明代中期の「多彩磁は1ダースに達」せず、「単彩釉は……すべて白釉」である。トブカブ 1987(1), p. 36.
- (11) トブカブ 1987(1), p. 49では300個以上。
- (12) トブカブ 1987(1), pp. 11-13. これにはヴェトナムの製品7個が含まれている。別の個

- 所では、合計10,434個であり、さらに、日本陶磁器721個、共和国時代にトプカブには
 いった約3百個もある、とされている。トプカブ 1987(2), p. 6.
- (13) 「青磁はオスマン宮廷で特に愛好された」。トプカブ 1987(2), p. 20.
- (14) 新安沖からの引き揚げの「結果いまでは韓国の諸国立博物館が世界で最も多くの中
 国青磁を蔵し」、「これに次ぐ最大の青磁コレクションがトプカブ・サライのそれであ
 る」。韓国収蔵の青磁が14世紀前期だけの製品であるのに対して、トプカブの青磁は2
 世紀に亘る。トプカブ 1987(2), p. 21.
- (15) 14世紀から15世紀初期の青花磁器が94個あり、「アルデビルよりは少ないが、それ以
 外のどこよりも多い」。トプカブ 1987(1), p. 14.
- (16) トプカブ 1987(1), pp. 49-50を参照。
- (17) トプカブ 1987(1), pp. 13-17.
- (18) トプカブ 1987(1), pp. 18-19.
- (19) ここの15世紀初期の青花磁器は、官窯製品と比べて、「作行きでも描画でもいささか
 も劣るとは言い難い」。トプカブ 1987(1), p. 15.
- (20) トプカブ 1987(1), p. 25.
- (21) トプカブ 1987(1), pp. 15, 34.
- (22) トプカブ(1), p. 16ではマラッカの指揮官。
- (23) トプカブ 1987(1), pp. 35-36.
- (24) トプカブ 1987(1), p. 40.
- (25) トプカブ 1987(1), pp. 43-45.
- (26) トプカブ 1987(1), p. 47. オランダ人の注文によって、見本を基に作られた西洋風食器
 のような、「過渡期様式」の青花磁器は、「ヨーロッパに或る数量がもたらされて」い
 る。その文様には、1635年に台湾から窯場に送られたチューリップ文様が含まれる。ト
 プカブ 1987(2), pp. 29-30.
- (27) 「過渡期製品に記された干支は明時代とすればすべて崇禎年間(1628—44年)に属す
 る」。トプカブ 1987(1), p. 48.
- (28) トプカブ 1987(1), pp. 45, 48.
- (29) 矢部 1992, p. 304.
- (30) 西田・出川 1997, pp. 87-88, 93, 100, 134.
- (31) 矢島 1996, pp. 117, 124.
- (32) 中沢・長谷川 1995, pp. 104, 107, 127.
- (33) 弓場 1990, pp. 49-50 (青磁は「約700点」とあるが、トプカブ 1987(1), p. 12では合計
 1,354個である), 64.
- (34) 三上 1988(b), pp. 164-165, 182-183, 187, 193-194, 210. トプカブには、18世紀ヨー
 ロッパの「精緻な細工と、美しい色彩でかざられた明るく派手な磁器」、すなわち、セー
 ヴルやマイセンの磁器も、かなり収蔵されている。三上 1988(b), p. 215. さらに、中国
 学会 1991, pp. 365-366; 三杉 1984, pp. 181-185, 204; 三杉 1981, pp. 158-161; メド
 レー 1981, p. 274; 三杉 1976, pp. 162-190; 西田 1976(b), pp. 295, 298-299 (金襴手
 44個)を参照。

- (35) 矢部 1992, pp. 284, 302-303, 356, 387.
- (36) 西田・出川 1997, pp. 87-88, 93, 100, 134.
- (37) 矢島 1996, pp. 100, 110, 113.
- (38) 中沢・長谷川 1995, pp. 104-105 (「ウマイア朝アッパース大帝」はサファヴィー朝の誤りである), 107.
- (39) 岡野 1993, pp. 60-62.
- (40) メドレー 1981, pp. 277-278.
- (41) この刻印のために、アルデビル旧蔵品は、個数においてはるかに勝るトプカブ旧蔵品よりも、「編年研究のうえでは」有用である。三杉 1984, p. 147.
- (42) 三杉 1976, pp. 198-199, 209-213, 221-227. また、三杉 1986, pp. 126-127, 130-131; 三杉 1984, pp. 146-149 (約7百個の元・明代の青花磁器が中心で、36個の元代青花磁器が含まれる), 204; 三杉 1981, pp. 162-166; 三杉 1976, pp. 135-136, 204, 206-230を参照。さらに、中国学会 1991, pp. 309, 365; 三上 1988(a), pp. 146, 179-180; 西田 1976(b), pp. 295, 299 (元代青花磁器37個)を参照。
- (43) 岡野 1993, p. 63.
- (44) 三杉 1976, pp. 132-134. さらに、三上 1988(a), p. 180; 三杉 1986, pp. 131-133 (青磁10, 青花磁器21, 緑・金彩磁器十数個)を参照。
- (45) 三杉 1986, pp. 121, 123. ただし、三杉 1976によれば、所蔵品は青磁8個、15-16世紀の輸出品青花磁器12個などである。また、かつてここにあった、ムガル帝国の第4代「ジャハーン・ギール」と第5代「シャー・ジャハーン」の銘を付けた、元代と15世紀の青花磁器は、今では「世界に散在している」。三杉 1976, pp. 127-128. さらに、金沢 1991, pp. 28-29, 32を参照。なお、ジャハーン・ギール銘については、トプカブ 1987(1), p. 37をも参照。
- (46) 三杉 1976, p. 128. なお、パトナはビハール州にある。
- (47) 三杉 1976, p. 128 (元代青花磁器を含む中国磁器百数十個のウィリアムズ・コレクションは、主としてこの旧蔵品であった)。また、三上 1988(a), pp. 146, 173; 三杉 1986, p. 121を参照。なお、19世紀後半に収集された、14世紀半ばから17世紀にかけての青磁・青花磁器約6百個からなるカミンズ・コレクションは、ウッタルプラデシュ州アウド藩王の旧蔵品であった。三杉 1976, p. 128. さらに、三上 1988(a), pp. 146, 173-174; 三杉 1986, pp. 120-121を参照。